平成29年度研究助成 【音楽振興部門】より

小中学校教員と連携して開発する音楽科授業におけるICT機器を活用したActive Learningのモデルプラン

～ICレコーダーを「音楽の鏡」として、「気づく・感じ取る・比べる・考える・まとめる・伝える活動」により音楽的自立をめざす活動～

愛知教育大学音楽教育講座
教授　新山王政和

1．今回助成を受けた研究の背景

筆者の研究は、専門教育を対象としたものではなく、小学校および中学校（以後、小中学校と記す）に於いて一般の子供達を対象として行われる音楽科の授業分析である。そのため、特に小学校では音楽を専門としない学級担任による授業であることも多く、表面的な気楽さやストレス発散、癒し等を求める活動に終始してしまうことも少なくない。そこで筆者は、小中学校の教員を対象とした講習会や研修等に於いて、音楽の活動や音楽科の授業が多くの人々に受け入れられる普遍的な“よさ”（良さ、佳さ、善さ）や“うつくしさ”等の美的感覚を追求したり、絶対的な正解の無い教科だからこそ自分なりの“解”を追究したりする学びの本質を育むのに適した科目であり、それは子供達にとって真に価値ある成長の場にもなり得ることを提案している。そして、自らの演奏を冷静に振り返り、思考を伴った試行錯誤を繰り返すことで得られるものの大切さや、結果だけを求めるのではなくその創意工夫のプロセスにこそ意味があることを子供達へ伝えるように勧めている。次に筆者の私見と持論について触れておきたい。

2．筆者の私見と持論

演奏とは、単に音符を音へ置き換える作業ではなく、自分の音楽的要求というフィルターを通しながら楽譜を音楽へと再変換することである。そして鑑賞も、漠然と音を耳にするのではなく、自分の嗜好に合った演奏表現を求めながら自らの音楽的要求と照らし合わせて聴くことで心の中に生じる情動の変化を楽しむものである。つまり“演奏”や“聴く”という行為そのものが､創造的な活動を行っていることになる。筆者による一連の研究では、イメージングや思考を伴った活動をコアにして演奏表現と鑑賞が一体となった活動によって様々な音楽構成要素に気付き感じ取り、その働きや効果を知り、それを操る技や方法を身に付け、演奏表現や聴き方を改善したいと感じることができるような活動を模索している。具体的には、音の繋がり方（メロディー）や音の重なり方（ハーモニー）、

音の並び方（リズム）から形づくられる音楽のよさ（良さ、佳さ、善さ）や、組み合わせの違いから生まれる微妙な響きの変化、そこから生まれる曲想や雰囲気の違いを子供達が意図的・意識的に聴き取り感じ取ろうとし、自ら音や音楽へ向かっていくような「能動的に音楽と向き合う活動」について、演奏と鑑賞の両面からアプローチしている。そして、この「能動的に音楽と向き合う活動」が子供の音楽的自立を促すことへ繋がり、自分なりの意志や根拠を持って「音楽や演奏表現の“違いを楽しむ”」ような人間に育っていくことをめざしている。

しかし現実には「楽しければよい」という考え方が根強く、すぐに結果が出る浅い活動を求める傾向がある。そして音楽を専門とする教員は自身の好みの活動を多く扱い、教師主導や逆に放任的な指導の下、生徒が思考停止状態に陥っていることもある。筆者は「答えが無いからこそ、自分で調べて確かめて自分の意思と根拠に基づいて“よりよい答え”を自分なりに導き出す」ことが音楽科授業の特徴であると考えているので、このような「思考を伴った試行錯誤」を軽視する現状は残念でならない。事実、音楽大学のレッスンですら、自分で楽譜を読み解き創意工夫を重ねて演奏を仕上げていくよりも、指導者にダメ出しをしてもらう方が楽だと考える教師依存型学生が存在することを耳にし、驚いている。

３．助成を受けた研究の概要

音楽科の授業において最も困難なことの一つは、「音は客観化が難しい」ことである。美術が自身の活動結果を目で見て振り返りができるのに対して、時間芸術である音楽は自らの演奏を客観的に捉えることは難しい。しかしこの自身の演奏を冷静に受けとめる「メタ認知」が無ければ、自らの演奏を振り返り高めていく活動は成立しない。これを補う方策として専門教育のレッスンでは録音を自身の客観化に活かしているが、これと同じ方策が小中学校の授業で集団活動を対象にして有効なのか、検証を進めている。

今、注目される「ICT（Information and Communication Technology）」は、タブレットだけでなく様々な情報共有機器を活用した全ての教育活動のことを示しているのだが、まずは子供にとって身近なICレコーダーを日常的に学習場面に取り入れることによって、自学自習の教材や自己教育の教具として使いこなしていくように促したい。現実には、まとまった数のタブレットと電子黒板を用意するのは容易ではない。これを補う過渡期的なものとして、ICレコーダーとアンプの組み合わせだけでも十分に効果があることを教育現場へ紹介していきたい。

４．研究と現代的教育課題のかかわり

４．１　批判的思考やアクティブ・ラーニングの視点から

前述したとおり今回の一連の研究でめざしていることは次の２点であった。

①音楽的に自己を客観視し、自分なりの“解”に向けた課題を見つける力を養う

②課題解決に向けて思考を伴った試行錯誤を繰り返して、創意工夫を重ねることのできる力を養う

これらは「現代的教育課題」の一つである「批判的思考（自己や自分自身の考えに対して批判的に向き合う力）」や、平成29年３月に示された文部科学省新学習指導要領の基盤である「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」に繋がるものである。よって、個人の価値観にのみ依拠した“ひとりよがりな演奏”や“思いや願いばかりの演奏”とは一線を画した、知識や技術の裏付けを伴う演奏表現の創意工夫を追求する活動として有益な提案ができるであろう。

４．２　音楽科における「生きた知識（更新される知識）」

文部科学省の新学習指導要領の基盤には、「生きた知識（更新される知識）」という考え方がある。そもそも音楽科における知識とは、それまでに積み重ねてきた音楽活動や音楽経験と照らし合わせながら既知の知識を自分なりに整理し（構造化）、それらの意味や働き、効果などを考えたり体感したりすることで、自分なりの嗜好や価値観へと高めていき（再構築）、さらに様々な体験や活動を通じて考えたり確かめたりすることで、自分自身の捉え方が間違っていないか、他の考え方は無いのか、自分なりの価値観に齟齬や矛盾は無いのか等を、思考を伴った試行錯誤によって確認し、知識をより強固なものとして更新していくものである。音楽の分野では「知っていることと出来ることは違う。知っているだけでは演奏に繋がっていかず、演奏として音楽表現へ結び付けることで知識が生きてくる」ということが知られているが、正にこれが構造化され再構築・更新される知識である。よって音楽科における知識には、この「生きた知識」も含めるように提案したい。

以上、今回助成を受けた研究の概要を説明してきた。「楽しければよい」という考え方が根強く、すぐに結果が出る浅い活動を求める傾向がある小中学校音楽科授業において、音楽と向き合うことこそが「生き抜く力」を育むことに繋がることを、今後も多くの教員に向けて発信していきたい。